



SB36・AWGハイライト

2012年 5月 23日 水曜日

この日一日、SBI、SBSTA、AWG-KP、AWG-LCA、ADPの下で多数のコンタクトグループ会合、非公式協議が開催された。

コンタクトグループおよび非公式協議

共有ビジョン (AWG-LCA) : 共有ビジョンに関するスピノフグループは、午前中に会合し、オブザーバーの参加も認められた。

締約国は、意見の集約が可能な分野の洗い出しに焦点を当てた。進行役のJiは、持続可能な開発への公正なアクセスに関する会合期間中ワークショップが仲介役を務める可能性があるとして述べた。

ボツワナはアフリカグループの立場で、ウガンダはLDCsの立場で発言し、中国、ブラジル、その他と共に、実施方法の重要性を強調した。一部の途上国がこの内容に関する議論を求めたが、先進国数カ国は、世界目標やピーク時の時間枠に焦点を当てるべきだと述べた。

中国は内容の重要性を進行役の報告書に含めるよう要請し、ブラジルもこれを支持した。日本は、作業が重複することに警告を発した。メキシコ、フィリピン、その他は、関連の内容要素を定義する必要があると述べた。トリニダード・トバゴはAOSISの立場で発言し、まず負担が何かを明らかにせずに負担共有を議論することはできないと述べた。

レビュー(AWG-LCA) : レビューに関するスピノフグループは、オブザーバーの参加も認められた。この中で締約国は、インプットの専門家による考察について議論し、今後の進行方法に関し提案を提起した。

日本は、オープンエンドの専門家会合を公式のものとするよう提案し、IPCCでの作業との重複を避けるよう求めた。トリニダード・トバゴはAOSISの立場で発言し、専門家グループ設置への支持を繰り返し、そのような組織はガイドの役割を果たせると強調したが、アフリカグループの立場で発言したボツワナ、中国、ブラジル、フィリピンは反対した。ノルウェーは、専門家組織はレビュープロセスを支援し、激励すると述べた。カナダは、レビューの全面的な審議を可能にすべくSBSTA/SBI合同コンタクトグループの設置を提案し、米国とオーストラリアもこれを支持した。

レビューの範囲（スコープ）に関し、サウジアラビア、中国、フィリピン、アフリカグループは、締約国はレビューの範囲に関する作業を継続し更なる審議を検討すると規定する決定書 2/CP.17 (AWG-LCAの作業成果)に留意した。AOSIS、その他はレビュー範囲を拡大する価値があるかどうか疑問視した。

数値／文章 (AWG-KP) : 午前中、数値／文章に関するスピノフグループの非公式会議で、余剰ユニットに関する第3の提案が提示された。

このプレゼンテーションでは、提案の各側面について詳細な説明が行われ、特に次の点が指摘された：全ての関係ユニットを対象とする（認証排出削減、排出削減単位、割当量単位）；第2約束期間のQELROsを現在の排出量レベル以上に設定して提出した締約国の余剰ユニットは削除する；前期からの余剰保留ユニットは国内の遵守評価にのみ使用可能であると規定する；現在の排出量以下のQELROsにインセンティブを提供する；明確な測定ポイントを提供する。

午後のスピノフグループ会合では、基本年または基本の期間の排出量に対する割合でQELROsを表わすだけでなく、CO2換算トンでもQELROsを表わした締約国に対し、追加情報が要請された。ある途上国グループは、5年間の約束期間と8年間の約束期間の QELROsを並行して扱うよう求めた。非公式協議が続けられた。

REDD+ (SBSTA) : 午前中のコンタクトグループ会合で、共同議長のGrahamは、SBSTA結論書で合意に達したと説明し、この中にはMRVおよび国内モニタリングシステムに関する締約国の見解などを記載した保留文章などの附属書を、ドーハでの審議に委ねることが含まれると述べた。同共同議長は、締約国が非森林化および森林の劣化を進める要素は極めて重要であり、更なる審議が必要だと考えていると説明した。同共同議長は、森林参照レベルや森林排出参照レベルへの指針およびセーフガードなど、時間がなく十分議論できていない問題に焦点を当てた。

REDD+ (AWG-LCA) : このスピノフグループは午前中に会合し、オブザーバーの参加も認められた。

AWG-LCA議長のAysar Tayebは、この問題で進展をみることが重要だと強調した。同議長は、事務局がテクニカルペーパーを作成し、資金的な困難はあるが、ドーハ会合前にREDD+ワークショップを行うため努力すると述べた。

その後、締約国はドーハ会合で何を達成したいか、特にREDD+での結果ベースの行動に対する資金供与の必要条件について意見交換を行った。一部の国は広範な議論を希望し、「条件 (conditions)」という言葉の使用に警戒感を示すものもいた。議論された主要な問題には次のものが含まれた：適応および他のREDD+の副次便益；REDD+を実施する諸国に対する2013年以後の資金供与の可能性；REDD+第3フェーズでの新しい市場メカニズム；準備フェーズ1および2でのREDD+支援におけるギャップ解消；森林統治枠組の外形と資金

との結び付き；資金に関する議論をSBIに送るかどうか、および作業範囲；支援のMRV；炭素以外の活動に対する支援；「結果ベース実績（results-based performance）」の理解向上；資金や多様なアプローチなど他のグループでの議論との相互関係。

AWG-LCAコンタクトグループ：午後のコンタクトグループで、締約国はまず資金に関し議論した。

多数の途上国が、2013年から2020年での資金ギャップに焦点を当て、資金規模を拡大し、新たな、追加的、予測可能な資金供与を確保する必要があると強調した。バングラデシュは、2013年から2020年にかけて毎年増加するよう提案した。また同代表は、緩和と適応への配分のバランスをとるよう求めた。コロンビアは、期間中期における資金の中間目標設定を提案した。バルバドスは、約束の場合と同様、早期開始資金にも中間期間を追加するよう提案した。さらに同代表は、長期資金に1千億ドル提供するというのは各国の適応を支援するには「極めて不適切（grossly inadequate）」だと指摘した。

米国は、2020年での資金目標は、2020年での有意の緩和行動という概念でなされたものだと指摘し、中間期間の資金約束を求める締約国が中間期間での緩和約束をするかどうか疑問視した。

技術に関し、AWG-LCA議長のTayebは、次の問題など議論すべき問題を指摘した：IPRs；技術メカニズムと資金メカニズムとのリンク；技術の環境評価における技術執行委員会(TEC)の機能追加の可能性；TECと気候技術センター(CTC)との関係。

対応措置に関し、AWG-LCA議長のTayebは、「ユニラテラルな措置とその世界的な影響（unilateral measures with global implications）」についてはさらに議論する必要があると強調した。インドは、スピノフグループに対し、対応措置の未解決の問題について、明確な期限を示して議論するよう求めた。同代表は、AWG-LCAにおいて必要な議論について説明し、AWG-LCA議長にステートメントを届けることになると指摘し、途上国数カ国もこれを支持した。

オーストラリアは、スピノフグループに反対し、「条約の下での対応措置に関係する全ての前向きな議論をとりまとめる」決定書 2/CP.17を指摘した。サウジアラビアは、締約国は終了するための作業をしているのであり、作業の取りまとめを行っているのではない、取りまとめのマンデートがあるようには見えないと強調した。米国は、ダーバン会議での作業は「苦勞して交渉した（painstakingly negotiated）」ものであると説明し、スピノフグループ設置の提案に反対し、オーストラリア、EU、ニュージーランド、メキシコ、AOSISもこれを支持した。



廊下にて

ボン会合の閉会が近づくにつれ、いくつかのAWG-LCAおよびSBsのグループは、議論のとりまとめとボン以後の進め方に重心を移し始めた。

ドーハ会合への期待感は、プラスマイナス両方がミックスされており、このことは、午後、COP 18およびCMP 8議長職が開催したオープンエンドの非公式協議でも明らかとなった。多くのものの意見には、ボン会合での進展のなさや「手順面の意見対立 (procedural wrangling)」でドーハ会合の成果も危うくなってきたことが反映されている。一部のものは、壇上のADP議長席が空席のままであり、議題書の合意も水曜日夜まで保留とされる中、ADPはCOPに報告できるものがあるかどうか疑問視した。

役員を選出に関しては、午後遅くになり、COP17議長職から地域グループのコーディネーターに対し、意見がまとまろうとしていたが、結局不調に終わった、「この行き詰まりからすると、ADP議長団は選挙で選ぶというのが唯一の道だ」との連絡がホームページに掲載された。当初は、ADPプレナリーを夜、開催することも発表されていた。マリタイムホテルはこのニュースで興奮した：「実際に投票が行われるなら、そのような出来事は条約採択以来、初めてだ」と。多数のものが長い夜に向け準備する一方、投票に至る前に解決できるのではないかと希望した。結局、ADPプレナリーは、木曜日まで延期されたが、翌日に何がおきるかわからないという不確かさがはびこっていた。

ADP議題書に関する非公式協議は、この日一日を通して開催され、暫定ADP議長の新しい提案を基に、夜遅くまで続けられた。「木曜日は面白そうな日だ」とある参加者は憶測し、「ADPの議論の印象からすると、このプロセスのダイナミックは変化しており、先進国と途上国両方の締約国の大半は、ADPの新しい手法に向けギアを切った、このような手法では、先進国と途上国という従来の分け方に厳密に従うわけではない、ただしこれまでと同様、共通するが差異のある責任が中心だ」とした。

GISPRI 仮訳